

2011年3月11日から一年余りが過ぎた。海外では段々語られる事が少なくなってきたが、世界中で日本に心を寄せ続けてくれている人達は大勢いるのであろう。今回は、ずっと私達日本人と共に心を痛み、想いを実行に移した2人のスイス人について是非お話したい。

昨年12月初旬に友人からメールをもらいYouTubeでこの曲のビデオを観たとき、無意識のうちに涙が溢れ出てくるという体験をした。ご存知の読者も多いと思うが、それから3ヶ月後にこの『未来の友達』の作曲者パスカル・ケーザーさんに会えた時、「きっと必然という偶然だろう」と感じ、取材を申し込んだ。

大震災直後の彼の一番の願いは、「被災地の子供達の心の支えになりたい」ということだった。世界中から義捐金が集まったリ、チャリティーコンサートが開かれたりしているが、ミュージシャンであり、ベルン州の中学校で音楽を教える自分に一番適した方法は、「自作の曲を自分の生徒達に歌ってもらおうことだ」とすぐに実行に移した。時が経っていくにつれ、ニュースとして語られる事が少なくなっていくだろうが、そんな時に「みんなのことは決して忘れない。いつか会おう!」と、遠い国から想い続けている人間がいるということ、被災地の子供達に伝えなかったのだという。

原曲は一夜にしてできた。その曲に、もっとも多くの人が共感してくれるようなシンプルでポップなアレンジを施し、アメリカ留学時代の友人で、ロサンゼルス在住のギタリスト松野啓太さんに日本語の歌詞をつけてもらった。それを日本語を知らない生徒達が、プロのミュージシャンのプロモーションビデオ顔負けの映像の中で語りかけながら歌うのだから、奇跡的だ。自分のパートを1日で覚えたという生徒も含め、歌が上手く、日本語の発音に問題の少ない9人がソロに選ばれたが、コーラス部分では25人の生徒が参加してくれているという。学校の裏の砂岩発掘場を被災地に見立て、生徒達が見守り歌いかける中を、赤いお揃いの甚平さんを来た日本人ハーフの姉妹とみられる子供が歩き(後でケーザーさんのお嬢さんと判明)笑顔を取り戻していくこの美しいビデオは、完成までに100時間以上をかけ、地震から9ヶ月以上経った2011年11月29日、YouTubeに掲載された。

その後の反響の早さと多さは彼の予想を越えていた。12月9日にニュース配信サイト『らばQ』で取り上げられ、翌10日にスイスインフォに掲載された時にはすでに1万回、ベルン新聞で22日に取り上げられた時点では2万4千回 YouTubeで再生され、現在もその数は増えつづけている。『NHK特ダネ! 投稿DO画』でも2012年1月15日に放送され、数えきれないコメントが寄せられた。たまきはる福島基金のHPには、福島の中学生からスイスの子供達へのアンサーソングも掲載されている。こうして未だ見ぬ国の子供達が音楽を通じて友達となった。「いつか会いたい」を実現させるために、もしかしたら交換留学などにも行き着くのかもしれない、とケーザーさんは将来に希望のまなざしを向ける。

インターネットを使い広い範囲にメッセージを届けたケーザーさんとは逆のアプローチで、狭い範囲に集中的に心の癒しを実現させようとしている例もある。

ヘアート・プフェンドラーさんは2011年3月19日、スイス航空のチーフ・パーサーとして東京発チューリッヒ行き機上にい

た。「震災と津波の被害に原発事故が重なり、日本から脱出しようという人で満席になるのではないか」という彼の予想に反して、異常に空いていた機内の窓から見下ろすと、津波が破壊した東北の海岸線に雪が降り続いていた。「自分の真下に、今もなお、寒さの中で助けを求めて凍えている人がいるはずだ。この飛行機の空席にそんな人達を乗せて、温めてあげたい」と痛切な心の叫びを覚えた彼は、降機後すぐに実現に向けて踏み出したのである。しかし救済システム自体が出来上がっておらず、津波被災者の状況がまだ把握できていない。そしてパスポートはおろか、自分の身分証明、姓名すら告げられない子供達も存在していたような当時の状況から、1年後の実行を目標に『Wings for Japan』という津波被災者の若者達のための長期的ケアを目的とした団体を発足させた。

8月には、文藝春秋から『つなみ』と題した80人の被災児の作文集が出版された。そのネットワークを利用し、選出された最初の15人の被災児と付き添いの大人を含む25人が、震災1周年を迎えた直後の今年3月27日にスイスへ向けて旅立ったのである。

出発前の三ヶ月間は働き詰めだったというプフェンドラーさんは、文藝春秋とスイス航空、スイス観光局の協力を得て、ユングフラウ登山や雪山ハイキングでスイスの自然に触れてもらい、また、パラグライダーやローパーク、動物園など子供達が喜びそうなプログラムも組んだ。

一行は1週間のスイス旅行で段々心を開いていき、お互いの体験を語り始めたようだ。津波で学校から避難したまいちゃんは、家にいたお母さんと4ヶ月の弟を津波で流された。はるなちゃんとなつみちゃん姉妹の一家4人は津波に飲まれ、ずぶ濡れのまま2日間、雪の降る山を彷徨い、山寺のお坊さんに助けられた。まさと君

としひこ君兄弟は、両親を早く亡くし、祖母に育てられていたところへ、津波で祖母も失い、今は叔母の家に引き取られている。最年長17歳のよしのぶ君は津波から母親を救ったそうだが、旅行中一度も笑顔が見られなかった。しかし、年長児がブライアン・アダムスのオープンエアコンサートに招待された時、彼はずっと微笑み続けていたという。これも音楽の力かもしれない。彼の次に年長のたけのり君も音楽が大好きな16歳だが、津波でギターが壊れ、もうずっと弾いていないと嘆いていた。音楽からの救いを期待し、プフェンドラーさんは、息子さんにプレゼントしたがほとんど弾いていないエレキギターを、たけのりくんに送ってあげる約束をしたという。それぞれが他人の運命にも耳を傾け、自分の気持ちも吐き出し、傷跡を少しでも癒して、明日に向かって生きて行くための元気を養ってもらうことがプフェンドラーさんの目標であった。今後も、せめて80人のうち希望者全員をスイスに招待するため、あと3回から5回の旅を継続的に実現させるという。

地震、津波、原発事故全ての被災者への想いで心が潰れそうになったら、下記の処方箋をお試し下さい。どんな小さな事でも自分のできる事をして、世界中の人々が支え合って生きていけますように。



第4回 スイス人の実行力

音楽の処方箋

文/中東生

ビデオ「未来の友達 / Mirai no tomodachi」
作曲: Pascal Kaeser 作詞: Kay-Ta Matsuno
映像: Alfonso Goldillo (www.youtube.comで視聴できます)